

可茂農林事務所の普及活動状況 令和6年9月末現在

ぎふ農業・農村を支える人材育成

■可茂地域農福連携会議 優良事例を現地で見て聞いて学ぶ

農業分野と福祉分野の関係者による情報交換や相互連携を図り、可茂地域における農福連携の取り組みを推進することを目的として、可茂地域農福連携会議を組織している。9月6日には、今年度初めての連携会議を開催し、関係者25名が出席した。

当日は、岐阜県の農福連携の取り組み情勢やぎふ農福連携推進センターの業務を紹介した後、管内のマッチング事例としてJAめぐみのみのかも営農経済センター長から栗選果場作業受委託の取り組み概要を説明いただくとともに作業の様子を視察した。委託を受けたB型福祉事業所職員1名と利用者3名の計4名1チームで手際よく作業に従事している様子を見ることができ、JAから、米の集荷施設と栗選果場の運営が重なり職員の配置に苦労するが、農福連携の活用により職員配置が改善されているとの説明があった。

農林事務所からは「生産組織等で人手が必要な時期や作業において活用できないか、まずは相談・情報共有してほしい。」と、農福連携への取り組み検討を呼び掛けた。

(地域第一支援係)



【作業の様子を視察する関係者】

■新規就農者の育成 就農塾でナスの栽培技術を習得

JAめぐみの就農塾は、さといも、ナス、クリの3コースがあり、就農希望者を中心に栽培技術・知識の習得を目的に開催されている。

ナスコースでは、9月5日に今年度5回目となる現地研修会が開催され、塾生3名が参加した。研修会場は関市の若手ナス農家のほ場の一部をお借りしている。

はじめに、JA職員が収穫後半の栽培管理について資料説明を行った後、指導農家、JA職員及び農林事務所担当者が、主枝の摘心や収穫作業の実習指導を行った。塾生は作業にあたり疑問や確認など積極的に質問し、理解して実習に取り組んでいた。

実習終了後は、JA中濃なす選果場で実際の選果状況を見学し、収穫されたナスが規格ごとに箱詰めされ、市場へ出荷されるまでの工程を確認した。

就農塾は3月まで現地及び全体研研修会があり農林事務所は研修会開催及び就農へ向けた支援を行う。

(地域支援第一係)



【栽培管理の説明を聞く塾生】

■農業大学校生 実社会での農業・農家生活を体験

岐阜県農業大学校では、先進農家での農業体験を通じた学生の経営実践能力向上を目的に「先進農家派遣学習」として、2年生は1ヶ月、1年生は1週間のカリキュラムが組まれている。

農林事務所は、指導農業士等の担い手リーダーと連携して学生の希望に沿った受入農家を選定し、1年生6名が、9月9～14日に3名の受入農家のもとで学習に励んだ。



【ホップの収穫作業を行う
学生を指導する受入農家】

9月11日には、農業大学校の先生と受入農家を訪問し、学生の様子を聞き取りした。学生は、慣れない環境の中ではあるが、受入農家からも積極的にコミュニケーションを取っていただき、和やかな雰囲気の中、熱心に農作業に取り組んでいた。

農林事務所では、今後も農業大学校の活動を支援し、農村青少年の育成を推進していく。

(地域支援第二係)

ぎふ農畜水産物のブランド展開

■いちご 本年のいちご栽培への取り組み

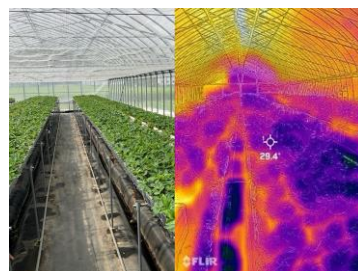
可茂管内の本年度のいちご生産は、22経営体、面積4.6ha（うち共計出荷が17戸2.8ha）で、ここ数年の間に新規就農者6名のほか企業参入も4社あり、若返りが進む産地となっている。

今年も高温傾向が顕著で、花芽分化の遅延が心配されたが、8月下旬の降雨による気温低下の影響か、濃姫・美濃娘の分化は昨年と比べて早く、9月中旬から苗の定植が始まった。農林事務所では花芽分化遅延防止のため、育苗後半の苗の窒素レベル低減目標を掲げるとともに、定期的な窒素レベルの測定、遮光資材の活用などのほか、屋根への遮熱資材塗布実証などにも取り組んできたが、塗布剤など高温対策の効果は現時点で明確ではなく、今後の見届けが必要である。

また、定植後は、導入2年目となるグリーンな栽培体系への転換サポート事業（国補）を活用し、アザミウマ類・コナジラミ類を対象とした新たな天敵防除体系の実証や、紫外線照射によるうどんこ病防除の実証にも取り組むこととしており、12戸の若手農家を中心に実証資材導入など準備を進めている。

農林事務所は、今後も生産安定と品質向上を目指した活動を継続していく。

(園芸産地支援係)



【サーモグラフィーによる
育苗ハウス遮熱効果の測定】